九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[015]史淵表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2341034

出版情報：史淵. 15, 1937-03-30. Faculty of Law and Letters of the Kyushu Imperial University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

彙報

九大史學會例會

○講演會

昭和十一年度第九回例會は十二月六日午後一時より第二學生集會所にて開會左の講演あり聽衆左の如し。

一、加茂眞淵と香川景樹　竹岡勝也教授

眞淵は歷史理解の一つの方法として時代區分を行ひ上つ世、中つ世、後の世に分つた。卽ち日本文學の中に雄々しくして雅びたる高き段階より順次頽廢し來る過程を見出し、而してその國民精神の頽廢は文學を生み出す心言葉以外のものではないとして居る。卽ち眞淵の史觀は降下史觀である。併しながら眞淵の史觀が愚管抄或は後世備者のそれと異る所以は日本の古代精神に對する新しい理解と認識にある。然らば眞淵は古代精神を如何に理解したであらうか、彼によれば天地の生みの靈なる直き心これ古代精神でそれは又おほらかなる心雄々しくして雅びたる心でもあつた。これらの心の根源は天地の心に歸着する。かゝれば彼の古代主義は歷史的世界から脫脚して、自然主義的態度をとり進んで自然界の狀態は人間よりより直きものであると云ふ考に到達する。かゝる傾向は彼をして自然民族たるアイヌの生活に興味を持たしめ、又支那に老子を見出さしめたのであつた。

併しながら自然民族としてのアイヌの直き生活は寧ろ一切の自然民族に通ずる狀態でありながら彼の古代精神を根據付ける立場よりすれば此の自然民族の生活をより高く價値付けなければならなかつたのである。此處に彼の古代精神は動搖することを免れぬが此の自然主義はその古代主義の行きすぎた一面でやがて彼の古代主義は異つた方向、日本主義へと飛躍する。此處に於ては自然主義は彼の思想を根據付ける爲のものであり彼が再び日本の古代に立歸つた時、古代日本人の精神卽ち日本精神を見出したのである。次にその復古的傾向を見るに彼が上代精神、日本精神を理解する材料として選んだのは文學であつた。而して文學に於ては古の狀態はすべて失はれ彼に殘されたものは心言葉のみで從つて文學が古代を理解する第一の材料とされ之によつて彼の降下史觀は生み出されたのであつた。歷史は何故に降下しなければならなかつたか、それは支那より來つた人間的作爲就中理智的作爲の爲でそれは古代精神を頽廢せしめ、同時に皇室の權力の衰へともなつて居る。故に彼はしきりに儒教を攻擊し、一方復古は神の意志によるべしとし、復古の根本問題を心言葉、特に古事記神代の卷に見出し其の理解に達する

階程として萬葉が編みられ其處に歌道に重要な意味を求むるに至つてゐる。かゝる復古主義を主張した眞淵は晩年に至つては淋しい諦めの中に住しなければならなかつた。彼は古學、古へ振りの歌を唱道して來たがこれは自分のよくするところでない。世の中の推移は王權が根本問題であるとし遂に自からの樂しみとして歌を詠ずると云ふ地位に安住して居るのを見る。此の事は一面國學に一つの使命を託したものと云ひ得るのであつて心言葉の問題を朝廷の權力の問題と分離して考へ得ずとする立場は次いで來る國學者によつて繼承されて來る。

次に景樹を述べんとする意味は明治維新には國學の影響が考へられねばならず眞淵の思想は維新によつて實現されたと考ふることを得る。然し一面に於て國學者の偏狹な日本主義に對する非難が起り景樹も其の非難者の一人であるからである。景樹は和學者たる事に於ては眞淵と同じであつたが、景樹はまことを現代に見出し、古代は素朴にして野性を脫しないものであるがそれが文化の發達に伴つて華麗な雅びたるものとなるとする。即ち景樹の歷史觀は眞淵が歷史に墮落を見出したのに對して歷史を文化の發展として理解する。眞淵が古の心を體得し眞現せんとしたのに對して景樹はそれを不可能とし歷史の推移に必然的な力を認め大御代の歌は大御代の手振りを以てすべしとした。かゝる態度は景樹をして「新學異見」を著はして眞淵の「爾比眞奈備」を攻撃する等色々な意味で國學者を非難せしめることとなつた。

國學は明治維新にとつて大きな役割を演じてゐるのであるが明治十年代を境としてその清算期に入り國學に對する批判が醒めて來る。その一形態として景樹の「新學異見」を擧げ得るであらう。景樹の攻撃は現代的な思想に立脚しながら猶歌學の範圍に留つたので社會的には影響を持たなかつたが古學そのものの本質の問題に觸れて居る點に於て國學清算思潮の先驅としての意味を景樹の歌論に認めたいと思ふ。

一、宗教史と原始キリスト教　佐野勝也教授

原始キリスト教の研究に於て、新約聖書はイスラエル民族の宗教思想によつて書かれたものではあるが隣接諸民族の影響の存することも明らかである。又新約はヘレニズム文化の世界に於て成立したものである。故に十九世紀末よりヘレニズム文化特に宗教文化の研究が起り先づ新約の書かれた言葉コイネと稱する特殊のギリシヤ語の研究がベルリン大學のダイスマンによつて現はれた。彼はエジプト、小亞細亞地方の碑文の研究の結果コイネは新約のみのギリシヤ語でなく當時

の通俗ギリシヤ語、異教の用語とも共通であることを明らかにした結果異教研究の必要が認められるに至り大戰前迄は此の宗教史的研究の風潮大いに行はれた。

併し斯くの如き研究に對して反對する意見も大いに現はれ、アルベルト・シユワイツアーは舊約における異教の影響は之を無視するも差支へなき程度のものとし、危機神學の主張者ブルンネルは言語の價値を重視する方法をとらず、又異教研究者中にも原始キリスト教と異教との共通點を指摘せんが爲ではなくして差異を發見する事を其の目的とする者もあつた。

宗教史的研究に對しては以上の諸反對があるが更に大戰後猛烈な反對がヨーロツパ特に獨逸に現はれた。辯證法神學即ち夫れである。何故に彼等は歷史的研究に反對するか。ブルンネルは云ふ。歷史は絶對にキリスト教を捕へ得ない。キリストとか新約とかを歷史的事件として因果の系列の中に置いて發展的に之を取扱へば神の啓示性は無くなつて了ふではないか。我等は神の啓示たる原始キリスト教を歷史的に研究することは斷念しなければならない、と。又バージル大學のカアル・バルトは私は歷史的批判的方法に對して決して反對でない聖書の理解の準備として決して余計なものではない。——即ち彼は余計なものではないと云ふ程度にしか之を認めない——若し過去の歷史的批判的研究方法と昔のインスピレーションによる方法とが互に衝突して二者何れかを取らなければならぬ時は自分はいさぎよく前者を捨てる。然し幸なことにはその必要はない。兩者は決して衝突しないっと云ひつゝキリスト教は人間の所産でなく神の啓示によつてのみ成立すると主張する。バルトと反對の立場に立つものにボン大學のゴガルテンがある。彼は神と人とはサークルの關係にある。人間は神によつて存在し人間を通じて神に到るとする。更に同じ問題を異つた立場から明らかにしたウオツベルミンはバルトが事物の秩序と認識の秩序とを混同せるを指摘した。

自分は思ふにキリスト教は啓示によつて立つとするも辯證法神學の云ふが如く歷史的研究を否定する必要があるであらうか。神は超經驗的であるから經驗的方法では神の啓示は捕へられ得ないとし得るであらうか。啓示が一度人間に與へられれば經驗化される。その經驗化されたものは啓示でないとするのは誤である。然し立場をかへて之を見る時、辯證法神學は歷史的研究がキリストを余りに人間的に考へて神的要素を無視し過ぎた時に當つて經驗的實證的に研究される彼方の世界に注意すべく重要な警告を與へたものであつた。

我々は歷史家としての立場を失はず而かも神の存在をも失はないで宗教史の研究を爲し得ると信ずる。神

學者と歷史家とは本來提携す可きもので、歷史的研究によつては宗教史の中心問題たる啓示の研究は不可能であると云ふことの誤れる如く、經驗以上の世界は神話の世界であるから秘密は存在し得ず、とする否定的態度も亦誤である。互に互の分野を尊重する事によつて宗教史の研究に從ふべきであると思ふ。

（文責在中者、檜垣）

○晩餐會

講演後の晩餐會席上左の展覽發表あり。

博多附近採集青磁片と高麗青白磁碗覽　檜垣元吉氏
東京京阪地方旅行談　川上市太郎氏

支那學會

昭和十一年十一月二十八日（土）

井邊支那語講師歡迎及び本城說治君卒業祝賀會。正午より學生集會所にて開催。晝餐後本城君の卒業論文「司馬遷の史學思想に就て」の發表あり、次いで井邊講師の感想談ありて四時半閉會。參會者は重松教授山内講師、日野講師、井邊講師、西本副手、本城副手久米、安倍、近藤、芝、尾形、

尙、井邊講師は本學部東洋史科第五回卒業。本城君は副手として支那學研究室に入り引續き研究される。

昭和十二年一月廿日（水）

天野元之助講師歡迎會

滿鐵調査課の天野元之助氏來校を機に、正午より第二學生集會所に歡迎會開催。參會者は楠本教授、目加田助教授、日野講師、井邊講師、西本副手、本城副手、安倍、久米、近藤、尾形（尾形）

九州考古學會

昭和十一年九月二十七日例會

八幡市及折尾町を中心とする諸遺蹟の見學を行つた。見學地は左の通りである。

東筑中學聚集品
折尾町則松廢寺趾及瓦窯
東口目塚
陣ノ原橫穴
八幡市高槻石器時代遺蹟
八幡中學聚集品及名和氏聚集品
小倉市上到津古墳群—石槨式、箱式棺、甕棺

昭和十一年十一月一日例會

日本古文化研究所の本年度調査事項として、筥山講師の手によつて目下發掘調査が行はれて居る。糸島郡怡土村の怡土城趾の見學を行つた。從來單に土壘及五ケ所の望樓のみ發見されて居たのであるが、今回の發掘

に依り南邊一ノ坂附近から礎石群が發見せられ、しかもその礎石の配置は各柱間十尺、三間二面のプランを持ち、其の周圍は石垣によつて基礎工事を行つて居る事から、樓中最大プランを持つ堅固なものである事が明にされたのである。なほ此の外此回の發掘調査によつて土壘の構造も漸次明にされ、その調査の結果は期待するに充分なものである。歸途笠氏宅にて發掘品を見學した。土壘内側の泥土中から發掘された下駄は後代のものと思はれるがそれが古式のものであるだけに興味あるものであつた。

昭和十一年十二月二十一日

醫學部解剖學教室平光教授の歸朝歡迎の爲惠愛會館に於て例會を行つた。當夜の演題次の如し。

舊石器に就いて　平光博士

怡土城の發掘調査　鏡山講師

肥前田代甕棺遺蹟其他　鷲淵幹雄

この外昭和十一年十月中國史研究室の有志の手によつて市外三宅村老司の瓦窯の發掘調査を行つた。三宅村は筑紫官家の故地であるが、嘗て同地から觀音寺阯及その寺に使用された瓦窯が發掘された事がある。今回のものは同地より南二粁にあたり、その瓦が同一樣式を持つ事が注目される。道路開鑿の爲に破壞され、その全貌を明にし得ない。發掘された瓦は豊富であつて丸瓦、平瓦の類が最も多く、蓮花紋、唐草紋の瓦當も多數發掘された。此の内には半燒成のものもあるがその粘土は良質である事と、未使用のものである爲に、その紋樣は手の切れる樣な鋭さを示して居る。樣式上、太宰府關係の建築に使用された最古の樣式と一致して居る事が、その年代を想定する基準となるのであるが嘗瓦窯阯燒成の瓦が何處に使用されたか、又その分布を究明する事が殘された問題である。（有光）

修學旅行

昭和十一年度修學旅行は豫定の如く七月初旬擧行。長沼教授は殘念ながら御參加なく一行は竹岡教授、鏡山講師外十二名であつたが、高野山にて矢崎教授が參加せられ、奈良より先輩榊原兄の伊勢より來り會せられ行を共にせらるるあり、快を盡した好旅行であつた。

先づ第一班は四日午後四時十八分、第二班は五日午前六時三十分、博多發、各五日奈良魚佐旅館に入る。

六日には早朝興福寺境内を經て博物館に到る。ガラス越しながら猶其の正しき色と形態に於て古美術を見られる事は我等の心を醉はしむるに足り、隔裡を掠めるくさぐさの想ひは盡きない。或は神野寺彌勒小坐像の軀幹の細さに百濟觀音との關係を思ひ、或は推古

の多くが金銅像或は彩色像に復原して考ふ可きことを感ずる。考古學的遺物迄も我々が日常九州に於て見馴れたものに比して精製品の感を與へられるのに驚かせられる。一行は此處に於て遠來の榊原先輩に逢ふ。博物館を出で小雨中を法隆院へ。親しく見る四天王の迫力は想像以上で細部から云つても黒耀石の瞳の効果的なる、口脣の中に殘る朱の生々しさ、鎧の肩の金色の獸頭の毛描き等五彩は剝落しても力強い生命を我等の心に投げかける。次に轉害門を經て法華堂に入る。雨の爲堂内暗く天平の諸佛の面影も漸くに覗ひ得るのみであた。次に大佛殿に向ふ。雄偉な南大門の建築は巨木を二門に迄求めたことの偶然ならざるを語り、且つ此の門が鎌倉に非ざれば爲す能はざる大作なるを知る。大佛は常に變ることなくましましたが、許可を得て一行は臺座上に昇ることを得運辨の手彫を心ゆく迄眺め得たのは幸の極であつた。更に追々激しくなつた雨中を興福寺に向ひ、寺僧の案内にて東金堂金堂南圓堂北圓堂三重塔を見學後、魚佐に歸つて晝食、午後は自動車にて法華寺に向ふ。堂内に入れば長く手を垂れ給ふ十一面觀音は意外に小さかつたが、その氣品は四邊を拂ふの慨がある。又厨子の側に清純な弱さの魅力を偲ばしめる横笛の可憐な小像を見る。辭て同寺を辭し大軌電車にて藥師寺に向ひ、同夜は此處に一泊。

七日朝藥師寺の堂塔佛足石等を見學、白鳳藝術の迫らざる豐かさを讃嘆して後、自動車を驅つて唐招提寺に向ふ。同寺の諸佛の巨軀は大陸の風を其の儘に享けてか今日に至つても我等と直ちには馴染み難い何物かを殘すが如く、開山堂も黄金によるに非ざればその扉を我等の前に開かず舍利殿の傾く軒に莊嚴の氣が漂ふをおぼえた。次に自動車にて窓外に法起寺法輪寺の塔を望みつゝ法隆寺に入る。推古藝術の殿堂は吾人の期待に厚く對へて諸佛の微笑にも太く彈力ある柱にも潑溂たる先驅者の雄々しさたくましさが流れ今次の旅行中我等の受けた感銘の深さは此の時を以て極まる。金堂の古佛何れも渡金彩色の跡を殘して居る。支那を始め佛教の東漸するや必ず金人を夢みる王者の傳説を伴ふのであるが、色彩殊に金色の魅力が未開時代に於て佛教の受容と關連した事實を語るものか。初め金堂内の壁畫は幕に遮られ我等を痛嘆させたが、幸にも寺僧の好意で阿彌陀の淨土の左側、雄大流麗な菩薩像等を瞥見する事を得た。かくて我々は寫眞によつて描いた幾多の誤つた印象を訂正して如實に飛鳥藝術に對する一の見解を持つて同寺を去つたのであつた。

次に寺側の中宮寺に入り本尊如意輪觀音を我等も亦寬いで仰ぐ。一行中如意輪觀世の寫眞を購ふ人が多かつた。又破損した部分を衝立狀に蒐めた天壽國曼荼羅を

見、室生寺に向ふ。曇天の爲に闇いが夕刻迄に護摩堂彌勒堂、金堂、灌頂堂を一應見學、特に弘仁期の特色ある手法に對する理解を深め粉彩美しい金堂諸佛の光背を見得たことは望外の喜びであつた。又五重の小塔の與へた勾配の緩い檜皮の屋根の日本的な輕快な感じは翌朝も亦我等をして訪れしめずにはおかなかつた。夕食を終へて室生の龍穴に至らんとした頃は山間の夜深く終夜佛法僧の聲を聞く。散歩を終つて、長沼先生を始め不參加の學友達に寄せ書きを爲す。

八日は今回の大和旅行中最もコースの長い飛鳥地方の見學の日であつた。此の日先づ自動車にて大軌室生口に至り櫻井にて下車、聖林寺を訪ふて十一面觀音を拜す。此の溫容双ぶものなき菩薩は白木の厨子中に辛うじて安置され、臺坐の蓮辨は光背殘片と共に別置されてあるなど不遇にましますの感が深かつた。それより再び櫻井驛に引返して耳成驛に下車すれば耳成、畝傍、香久山を指呼の間に見得て大和路に在るの感を深くする。同驛より南して藤原宮址見學後泥濘中の行軍を起す。此の頃より鄕土史家島本一氏東道の勞をとられ行く行く豐浦寺址、向原寺址を歷、飛鳥大佛、酒槽石、岡寺、島庄石舞臺、橘寺、川原宮址、弘福寺、菖蒲池古墳、天武天皇陵、持統天皇陵、鬼の俎、鬼の厠、欽明天皇陵、檜隈墓、岩屋山古墳を順次見學、橘寺驛に出で北上して橿原神宮參拜、神宮前驛の傍なる畝傍考古館見學、此藏の遺物頗る多く牽午子塚發堀の七寶龜甲型金具等は特に注目された。此處にて島本氏とお別れして一路吉野に向ひ芳雲館に入る。吉野の谷は深く月山の端を出づる頃、先輩五條中學の足立浩兄來訪、一同所と人を併せ得て晩餐に歡を盡し深夜に及んだ。

翌九日朝は吉水神社藏王堂を經て下山、自動車にて清瀧に至り石器時代遺跡地を京都帝大末永氏の御案内にて見學後、吉野川と並行して西し五條驛下車、足立氏御夫妻の御出迎を受け榮山寺に向ふ。八角堂は其の特殊の虹梁に又天蓋に興趣盡きず又堂邊に貞觀八年在銘の古鐘、天平の七重石塔弘安年間の石燈籠等があり外に永承康和元中年間の古文書亦我等をして飽かしめなかつたが、今夜の宿泊地高野山に向ふ爲忽忽に中食を終り五條驛にて足立大兄と訣別、高野登山口橋本驛に向ふ。橋本より雨中を自動車にて玉川峽に沿ふて登山。山頂の十數町下にて下車、更に泥濘中を行軍して奥の院を經て蓮華院に到り荷物を置き山上に新築成つた金堂とその側に建造中の根本大塔を見る。又高野山中現存最古の建築たる不動堂を見學、最後に金剛三昧院を訪れたのであつたが、此處に於て我等を待つものに小栗宗丹の梅の襖繪があり、爲に朝來の疲勞を一瞬

にして忘れ去つた奇人も現出したりした後、政子建立の多寶塔内に鎌倉佛を見て淨華院に歸れば、颯爽たる矢崎敎授が我等を迎へられた。

十日朝は先づ靈寶館を見學、奈良平安の諸佛に馴れた我々は此處に更に鎌倉への發展を集大成して眼前に繰展げられた感を抱いた。九州に關するものとしては島津家久寄進の天鷲絨唐縫打敷、又志賀島神社の狛犬と比較す可き鎌倉の狛犬二双に心をひかれた。我等は高野に於て最も赤不動と廿五菩薩來迎圖とを期待し而かも共に之を見る事を得なかつたが、後者の摸寫を辛うじて此處に於て見る。九時半頃高野山大學に入り附屬圖書館にて目下編纂中の高野山文書に關して說明を拜聽、又喜海筆高山寺明惠上人行狀、其の他建長年中の差定八幡宮御朝拜並放生會會頭、天文十三年の宿坊證文以下の文書を拜見同大學を辭去、下山の途に就く。十日夜は醍醐寺一泊の豫定であつたが、奈良の見學が余りに忽卒の間に終つたので奈良に對する憧憬湧然としてわき、奈良再遊に衆議一決、奈良驛に下車。一旦魚佐に入りたる後、高畑町の玄昉頭塔、新藥師寺春日神社を見學。

十一日は早朝奈良發宇治に向ひ平等院に入る。丈六阿彌陀像上の圖蓋は纖細の限りを盡し扉繪等を仔細に見るに剝落汚損も甚だしいが、猶多くの部分は觀賞に堪へ、余す處なく黃金と五彩とに彩られた往事を追懷する時、藤原時代の幻影が如實に腦裡を去來する。それより後京都に入る途上矢崎先生の發議によつて、殆んど豫想しなかつた日野の法界寺を探訪することとなる。定朝の作になる阿彌陀如來は平等院本尊よりも更に吾人の理解に入り易く、又天井に接する小壁に描かれた翔舞する天人を望遠鏡の中に捕へ得た時は心から此の愉快なる寄り道に感謝せざるを得なかつた。水に泳ぐオットセイの樣に空に飛ぶ天人の顏頸等に見られた隈暈は我等の憶ひを橘夫人厨子に飛ばしめ、彼の天人と天人の間に描かれた木彫と紛ふばかりの臺股は鮮やかな印象を我等に燒き付けた。更に自動車にて最後の見學地醍醐に向ふ。先づ三寶院に入り奏の間、秋草の間、勅使の間に長谷川等伯等の障屏畫を見ては高野の小栗宗丹に感じた襖繪の魅力を新たにした。次に表宸殿に導かれ擧げ舞臺の間、中段の間、上段の間を見る。中段の間にて醍醐の花見に曼幕に代用されたと傳へらるる生駒等壽の所謂百双屏風に接したが、松の幹等急造の面影を殘してゐるのに微笑させられる。奥宸殿にて松月亭流枕亭を見學等日の百羽烏の屏風を見るに到つて土田杏村が山樂筆と稱せられ來つた三寶院の襖繪の筆者を等伯也とした事の偶然ならざるを想つた次に桐の大紋章を刻した唐門に箱崎宮樓門扉を想起し

つゝ五重塔内に入り胎藏界曼荼羅及び眞言祖師像を見る。竹岡先生は曼荼羅中の天狗かゝ思はれるものに就いて說明される。最後に五大堂内を見學し了り門前に自動車を待つ。時既に二時強豪の面上稍疲弊の色有りそれより京都に入り加茂川河畔で一同中食を共にして解散、辛苦を共にすること七日、惜別の情に堪へざるものがあつた。終に東道の勞をとられた方々、又御指導を給はつた諸先生殊に今年度の旅行に一脈の生彩を與へられた矢崎先生及び太田鐵雄副手。榊原先輩、又厚く我等を御迎へ下さつた足立先輩に對し深甚の謝意を表す。（檜垣）

昭和十一年度
第二學期史學關係講義題目

史學概論　長沼教授
國史
室町時代の海外關係　同
愚管抄講讀　同
日本紀講讀　同
上代文化の諸問題　竹岡教授
萬葉集演習　同
九州地方の上代文化　鏡山講師

西洋史
十九世紀國際史概說　長沼教授
演習A (Georges Weill.)　同
同 B (Gooch.)　同
東洋史
漢魏六朝、概說　重松教授
六朝及隋唐の西域、特講　同
北宋時代史　日野講師
演習、新唐書表曆志書本紀を中心に　同
其他
日本宗教史　姉崎講師
日本建築史　天沼講師
日本法制史演習　金田助教授
西洋法制史演習　武藤助教授
外交史　西山教授
佛蘭西法史講讀　野見山講師
西洋近世哲學史　四宮教授
ギリシヤ人の國家及其理想　中島教授
意志心理學史　矢田部助教授
近世教育史演習　松濤教授
支那哲學史演習　楠本教授
大乘佛典經典史　干潟教授
國文体變遷史　春日教授

中世日本文學思潮　小島助教授
大鏡演習　笹月講師
自然主義以後の佛國小說　須川助教授
ゲーテと獨逸浪曼主義　小牧教授
西洋經濟史　三田村教授

受贈圖書雜誌（自昭和十一年七月至昭和十二年三月）

研究資料彙報　十一、四乃至十二、一
現代佛教　百三十四乃至百三十七
心の花　四〇、十一乃至四一、三
鄉土史壇　二、十一乃至三、三
皇學　四、三乃至四
京城帝大史學會誌　十
最近の經濟史學會　十一、十二乃至十二、二
史苑　十、三
史學雜誌　四八、三
史學　十五、四
史觀　十
史潮　六、三乃至七、一
宗教研究　十三、五
華源　六
西洋史研究　十

東方學報　七
東洋文化　百四五乃至百五〇
地學雜誌　五七三乃至五七六
筑紫史談　六九
歷史教育　十一、八乃至十二
立正史學　八
國立北平圖書館々彙　十、四乃至六
史學集刊　二
史學消息　一、二乃至四